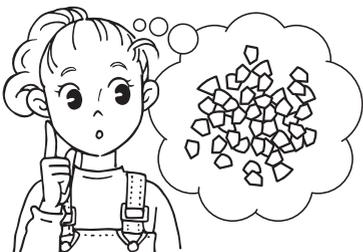
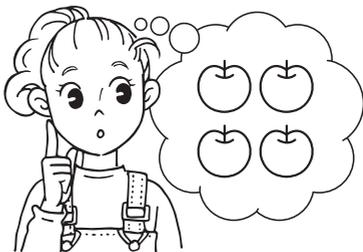


1 ネイティブのしている世界へようこそ

001



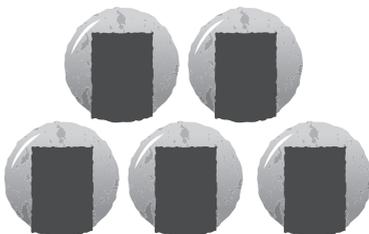
002



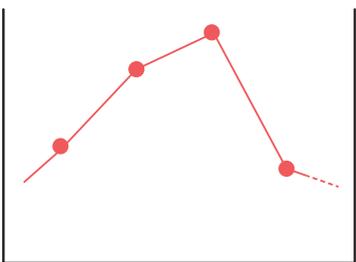
003



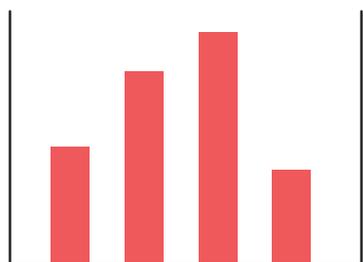
004



005



006



▶ たかが -s、されど -s

あるときアメリカ人の夫の父親となごやかに会話をしていたときに私が “I like apple.” と言った途端に会話が途切れてしまいました。不思議に思い、あとでその理由を夫に聞くと「父は君の言った意味がはじめわからなかったんだよ。それから君は英語があまりできない人だから、I like apples. のことを言っていたのかな？ と思ったのかもしれない」と言われました。たかが -s、されど -s です。-s をつけるかつかないかで、会話の流れが変わってしまったのです。

ネイティブスピーカーは、I like apples. のように -s をつけてはじめて、頭の中で左ページの絵2のようなりんごが想像できるのです。-s をつけないで I like apple. と言うと、ひどく特殊な場合だけに、絵1のように細かく切ったぐちゃぐちゃのりんごを思い浮かべることができるそうです。

英語の辞書に載っている [apple] は辞書原型です。実際の文では、この本で説明していくように -s や a や the や my などを使い、apples, an apple, the apple, my apple などにします。実際に使うことばと辞書原型の単語とを区別するために、この本では辞書原型の単語には [] を使って [apple] のように記述します。

▶ 「おせんべい」と「柿の種」

上記の会話の経験をきっかけに -s を使うことに注意していたところ、夫が “One peanut among some *kakinotane* tastes good!” 「いくつかの柿の種とピーナツ1個を一緒に食べるとおいしい！」と言ったときに、すかさず私は、some は「何個かの」だから、*kakinotane* には -s をつけて、*kakinotanes* となるのではないかと尋ねました。

ところが夫が言うには、絵4のように、ひとつひとつが独立しているおせんべいは some *osembeis* と -s をつけるが、絵3のような柿の種は1枚2枚とは数えにくいので uncountable なのだ。夫がほとんど初めて見る日本の食べ物に対してもすぐに countable と uncountable の区別をつけることができることに、私は大変驚きました。それまで英語には「決まった数えられる名詞」と「決まった数えられない名詞」があると思い込んでいたからです。「数えられる名詞が2つ以上ある場合には -s をつける、数えられない名詞には -s はつかない」と、私は中学校で習いました。そして空気や水、砂糖や塩などの一部のものは数えられない名詞で、多くのものは数えられる名詞だと思い込んでいました。そして「idea は数えられる可算名詞 countable、information は数えられない不可算名詞 uncountable」のように、問題となる単語が(countable)なのか、(uncountable)なのか、ひとつひとつ覚え

ていきました。

日本語の「おせんべい」も *osembeis* と *-s* をつけるのだから、どのような名詞が *countable* で、どのような名詞が *uncountable* なのかパターンがあるのだろうと思いました。より詳しく知るために様々な単語を多量に調べたところ、なんと、ほとんどの名詞は *countable* と *uncountable* の両方の意味があることを知ったのです。*countable* だけしかない名詞、*uncountable* だけしかない名詞を探すほうがむしろ難しいくらい。名詞は数えられる名詞(可算名詞)と数えられない名詞(不可算名詞)に分けられるものだと思い込んでいた私にとって、これはひどくショックな発見でした。

この経験から、単語によって数えられる名詞なのか数えられない名詞なのかが決まっているのではなく、英語のネイティブスピーカー(以下、ネイティブ)は初めて出会う「もの」でも、イメージによって選択する基準があるということに気づかされたのです。この気づきから、数えられる *countable* なイメージの共通の特徴と、数えられない *uncountable* なイメージの共通の特徴はどのように違うのか、私は探求し始めました。

▶ **discrete なイメージ、continuous なイメージという見方**

その当時は言語学者 Stephen Krashen の Acquisition Theory(第二言語習得説)が認め始められた頃で、私が参加した言語学会で、「acquisition(言語習得)は、習得を始めたら終わるときがある *discrete*(ディスクリート)なものなのか?あるいは *learning* のようにずっと続く *continuous*(コンティニュアス)なものなのか?」と、長い間議論をしていたことも、私の興味をひきました。そしてその議論に何度も出てくることばに「*discrete* ディスクリート」「*continuous* コンティニュアス」があり、それらの意味を辞書で調べたところ、ジーニアス英和大辞典(大修館書店)では

- ・ **discrete** : 分離した、別々の、明確に区別された
- ・ **continuous** : 連続的な、断続的な、切れずに続いた、繰り返される

と載っていました。

discrete(ディスクリート)なグラフは p.10 絵 6 のような棒線グラフです。そして *continuous*(コンティニュアス)なグラフは絵 5 のような折れ線グラフです。

私はこの言語学会での議論を通して、*acquisition*(第2言語習得)という概念の言語は、棒線グラフのように分離している *discrete* なイメージなのか、折れ線グラフのように連続している *continuous* なイメージなのかを、言語学者たちが決定しなければならないほど、重要なことなのだということがわかったのです。

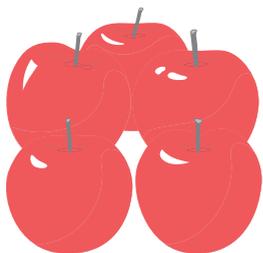
ちなみに *acquisition* には、数えられる *countable* な意味と、数えられない *uncountable* な意味の両方があります。同じ単語でも異なるイメージの「もの」「こと」を表現します。

そこで私は、数えられる名詞は「分離している」*discrete* なイメージのもの、数えられない名詞は「連続している」*continuous* なイメージのもの、であることに気づきました。

英文法では「可算名詞」「不可算名詞」というカテゴリーで習ってきましたし、辞書では[C][U]と区別されていますが、実際は、ネイティブのしている見方と同じように、「もの」「こと」を棒線グラフのように分離している *discrete*(ディスクリート)なイメージのものなのか、折れ線グラフのように連続している *continuous*(コンティニュアス)なイメージのものなのか、というイメージでとらえたほうが、その「もの」や「こと」をわかりやすくとらえることができるということがわかってきたのです。

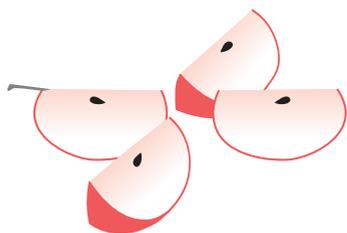
2 ネイティブが冠詞を選ぶ基準／クライテリアとは？

007



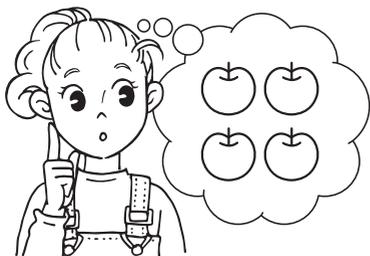
some apples

008



some pieces of apple

009



apples

010



pieces of apple

011



▶ 「もの」「こと」のクライテリアを明確につかむことができると、ネイティブと同じ英語の世界を共有できる

ネイティブはりんごやコップ、水などの名詞を言うときに、自分の表現したいイメージによってことばを選んでいきます。ネイティブの場合、左ページの絵のように、りんごはりんごでも状態の異なるりんごをイメージします。そして some apples, apples, some pieces of apple, pieces of apple のように異なることばで表現します。

ネイティブはその時々で自分の言いたい「もの」「こと」のイメージを的確に表現するためにことばを選んでいきます。ことばを選ぶためのクライテリア(選ぶ基準)を使っているのです。

ちなみに私たち日本語のネイティブスピーカー(以下、日本人)には、「もの」は4通りに見えています。幼いときに習得してしまったので普段は意識しませんが、ものを数える場合に「もの」を4通りのイメージで見ていることがわかります。

例えば「1本」と言えるもの、「1枚」と言えるもの、「1個」と言えるもの、「1点」と言えるものを思い浮かべてください。

- 「1本」は鉛筆、箸、柱、煙突など細長く線的なもの
- 「1枚」は紙、布、皿、葉など平らな面的なもの
- 「1個」はりんご、消しゴム、ボール、キャラメルなど立体的なもの
- 「1点」は衣服、道具、品物、製品などを点的に見る場合

これら「線」「面」「立体」「点」は、日本語の数を表現する場合のクライテリア(選択基準)となるイメージです。つまり左ページの絵11のように、「もの」を「線」と見る場合は1本2本、「面」と見る場合には1枚2枚、「立体」と見る場合には1個2個と数えます。逆に1本2本と数えるものは、鉛筆のように線的なものを、1枚2枚と数えるものは、紙のように面的なものを、1個2個と数えるものはりんごのように立体的なものを思い浮かべます。このように日本語のクライテリアとなるイメージを身につけると「もの」を日本語の世界で見ることができるようになり、複雑に感じる数え方がより簡単にできるようになります。

実は英語のネイティブも同じように、「もの」は左ページの絵のように4通りのイメージに見えています。名詞を使うときに語尾に -s をつけるつかないか、名詞の前に数、some, a, the, my などの限定詞 determiners を使うか使わないかを決定

する4通りのイメージ、英語のクライテリアがあります。

p.14 絵7から10を見てください。4通りの異なるりんごのイメージです。私たち日本人にはどのイメージも「りんご」と言えますが、ネイティブは、私たちと異なるイメージでりんごが見えています。そしてそれぞれのりんごのイメージによって five apples, four pieces of apple, apples, pieces of apple のように、数を使ったり使わなかったり、-s をつけたりつけなかったりと、ことばを変えてりんごを表現します。

ネイティブが名詞句 [限定詞(some) + 名詞(apple) + (s)] を発するとき、ことばを選ぶためのクライテリア(選択基準)は4つあります。

その「もの」「こと」は、

- 1) 分離していて discrete(ディスクリート)なイメージなのか
- 2) 連続していて continuous(コンティニューアス)なイメージなのか
- 3) 具体的で actual(アクチャル)なイメージなのか
- 4) 抽象化して virtual(バーチャル)なイメージなのか

です。

ネイティブは常に「もの」「こと」をこれら4つのクライテリアを用いて、p.14の絵のような4通りのイメージで見ているなんて、ちょっと信じられませんよね。英語の世界の「もの」「こと」が日本語とは異なるイメージだと分かって、彼らと同じようなイメージで「ものごと」を見ることは、非常に難しく感じます。

私は今でも正しい英文を書かなければならないときには、ネイティブのチェックが必要です。チェックしてもらおうと、いつも名詞句(限定詞+名詞+s)を直されます。直されても直された理由がよく理解できないと、同じ誤りを繰り返してしまいます。それでも英語をずっと学習していれば、いつかわかるだろうと思いつけています。

1999年に「ネイティブの感覚で前置詞が使える」を出版して以来、今まで増刷するたびに、ネイティブが名詞句の間違いを発見し、訂正し続けています。aやtheはネイティブにも難しいことだからと、理解することをあきらめてしまいそうでした。でも、あきらめきれずに長年こだわり取り組んでいます。非常に奥深い名詞句ですが、今の私がわかっていることを何とかわかりやすく提示して、さらに理解を深めてみようと思い、本書を作り始めました。

本書では、ネイティブが名詞句のことばを選ぶためのクライテリアとはどのようなイメージなのかを詳しく紹介していきます。名詞を使うときのクライテリアとなるイメージがどういうことかを知ること、ネイティブが見ている世界、視点をつかんでいきます。ネイティブのものの見方を少しでも理解して、ネイティブが見ている英語の世界を共有できるクライテリア(選択基準)を身につけましょう。クライテリアを身につけていくと、ネイティブの言う「もの」「こと」のイメージがより明確につかめることができるようになり、今まで以上に自分の伝えたいことをよりの確に伝えることができるようになります。ただし、クライテリアを身につけるためにはトレーニングが必要です。繰り返し繰り返し、本書の絵と英語を眺めてください。

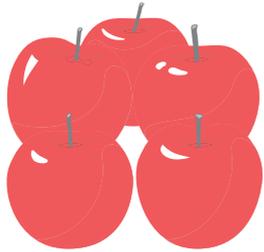
夕焼けをイメージしてください。そのイメージをことばで説明するのは至難の技です。名詞句のクライテリアとなるイメージをことばで説明するのも非常に難しく、むしろ絵の例からイメージを洞察してください。ほかの数多くの名詞にも応用できるように、日本語であえて説明してみました。日本語の説明はイメージをわかりやすくするための参考にするだけで、説明のことばにとらわれないでください。そして身の回りの「もの」や「こと」を英語のクライテリアを通して見てください。辞書も参考にしてください。繰り返し繰り返し、本書の絵と英語を眺めていくことで、あるときイメージの違いを自分自身で洞察することができ、確実にクライテリアが身につけていきます。そうすると「もの」「こと」が今までとは違って見えてきて、英語の世界に入り込むことができるようになります。

これから本書では、英語のことば「discrete ディスクリート」「continuous コンティニューアス」「actual アクチャル」「virtual バーチャル」を使ってクライテリアとなるイメージを説明し、さまざまな例を提示していきます。それぞれのイメージを日本語ひとことでは到底、表現することはできません。本書全体のさまざまな絵を見ながら、新しいイメージ、英語のクライテリアを学習し洞察し、自分のものにしていきましょう。

3 新しいことばのイメージを知る

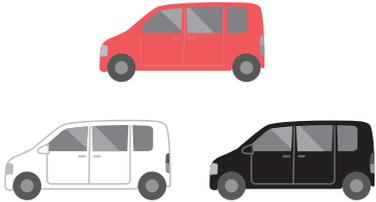
discrete ディスクリートなイメージ

012



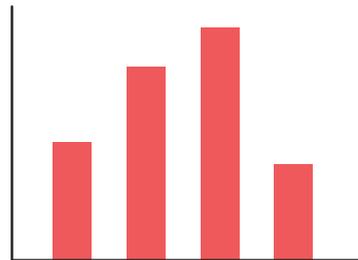
some apples

013



some cars

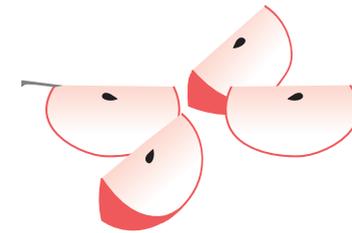
014



境界線で分離されて数えられる。
discrete：分離した、別々の、明確に区別された
『ジーニアス英和大辞典（大修館書店）』

continuous コンティニュアスなイメージ

015



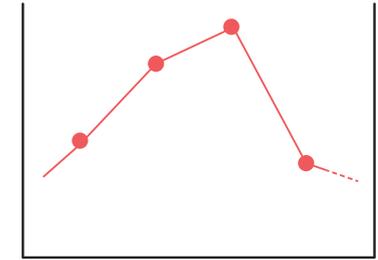
some pieces of apple

016



some water

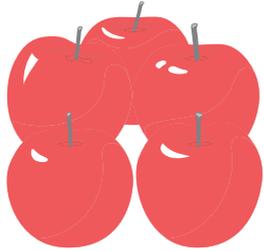
017



連続していて数えにくい。
continuous：連続的な、断続的な、切れずに続いた、繰り返される
『ジーニアス英和大辞典（大修館書店）』

actual アクチャル なイメージ

018



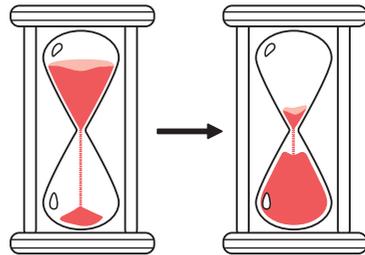
some apples

019



some water

020



some time

具体的に実在するもの。

actual : (理論上、想像上、のことでなく) 実際の、現実が生じた「存在する」

『ジーニアス英和大辞典 (大修館書店)』

virtual バーチャルなイメージ

021



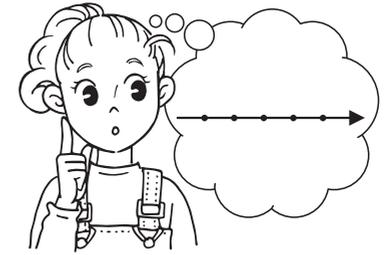
apples

022



water

023



time

頭の中で抽象化したイメージのもの。

virtual : 嘘の、仮の、仮想の、実質上の

『ジーニアス英和大辞典 (大修館書店)』